

■本因坊秀栄 囲碁棋士。<維新>で本因坊家が衰微するなか、転変を経て再襲し、隆盛を回復した。
ほんいんぼうしゅうえい
万次郎帰国・1852＝ 江戸湯島の本因坊外邸で、_本因坊秀和の次男に生まれる。幼名は土屋平次郎。兄は15世本因坊秀悦。
ペリー来航・1853＝ 1歳：

__14年上の村瀬秀甫にもっとも影響を受けながら育ち、
桜田門外変・1860＝ 8歳：
遣欧使節・・1861＝ 9歳：
生麦事件・・1862＝10歳：_林12世門人柏栄の養子となる。

薩摩藩士密航1865＝13歳：_柏栄が死去し、家督を相続して林13世となり、秀栄と改名。

明治維新・・1868＝16歳：_手合成績優秀により、本因坊・安井の賛同を得て四段に昇進した際、13世井上因碩が異を唱えて門人小林鉄次郎を差し向けて来ると、因碩本人としか争碁をしないと拒否。
初の日刊新聞1870＝18歳：維新の改革で、本因坊家の家禄が激減した上、火災に遭って貧窮に陥り、
廃藩置県・・1871＝19歳：兄弟間の和解による継承問題の解決のためか、父かつ師の秀和が村瀬秀甫を伴って名古屋に赴き、
学問のすすめ1872＝20歳：秀甫に連れられ、美濃・尾張・伊勢から大阪に旅するうち、
明治6年政変 1873＝21歳：秀和が死去、未解決のまま村瀬秀甫は再び疎遠となり、
家元を継いだ兄15世本因坊秀悦は現実の過酷さに精神を病み始め、

三つの内乱・1876＝24歳：小林と二十番碁を開始。

大久保暗殺・1878＝26歳：兄秀悦が発狂したため、弟と相談し、村瀬秀甫を16世に迎えようとしたが、仲介した中川亀三郎の謀略で、
秀甫と対立関係になる。
沖縄県編入・1879＝27歳：_村瀬・中川・小林らが旧弊打破の碁界再編をめざして設立した{方円社}に家元側も参加し、発会記念対局の最上位で村瀬と戦うことになる、兄秀悦を隠居させ、弟を16世本因坊秀元に立てて序列を整えたものの、諸条件がこじれて家元側は脱会、{方円社}関係棋士の段位を剥奪するに至るが、{方円社}が新時代の圧倒的支持を得て独自の免状発行を始めたため、家元は凋落一途を辿り、孤立して行く。さらに、財産を独占浪費する柏栄未亡人との関係も悪化、以後、臥薪嘗胆、捲土重来を期す。

明治14年政変1881＝29歳：
新体詩抄・・1882＝30歳：_柏栄未亡人が死去するや、
岩倉具視没・1883＝31歳：_林家を絶家して本因坊家に復籍し、
秩父事件・・1884＝32歳：_弟秀元を隠居させて、自ら17世本因坊となると、村瀬秀甫と対局を開始“和解の十番碁”。一進一退のなか、秀甫が体調を崩すと、本因坊を譲れという世論が澎湃とし、ついに名を取り実を捨てる条件で譲り、土屋姓に戻って、18世本因坊秀甫と最終局を打った直後、秀甫が急逝し、再び後継者問題が起こる。

__この間、雑念を振り払うかのように、碁に精進し、
国民之友始・1887＝36歳：_*17世本因坊を再襲。この頃から、実力も飛躍的に向上、
帝国憲法発布1889＝38歳：
大津事件・・1891＝37歳：_その存在を無視できなくなった{方円社}も段位省略ながら会報に対局を掲載し始め、
大本教・・・1892＝38歳：_{{方円社}}に対抗して、坊門の研修会{囲碁奨励会}を組織、
郡司千島探検1893＝39歳：_{{方円社}}新館建設記念で対局した際の会報の扱いに猛抗議し、ついに段位も掲載されるようになる。
日清戦争始・1894＝43歳：_{{囲碁奨励会}}に{{方円社}}の小林鉄次郎も出席するようになり、ようやく19世を名乗る。
日清戦争終・1895＝44歳：_*自らの教室{四象会}の開始を象徴に、全盛時代が始まり、{方円社}は衰退、
白馬会・・・1896＝45歳：
子規句歌革新1898＝47歳：_八段準名人に昇るが、

__江戸っ子気質もあって、経済的には苦しく、{四象会}も休会が続き、自身の対局も減少して行くと、

__これを惜しむ政財界有力者らの後押しで、

日露戦争終・1905＝54歳：_*{日本囲碁会}が組織され、{方円社}に最後のトドメとなる。田村保寿(本因坊秀哉)を七段に昇進させ、最後の勝負碁を行って圧勝。
満鉄発足・・1906＝55歳：_日露戦争勝利の国威発揚と徳川名人碁所との断絶を象徴するものとして、父秀和が望んでも得られなかった名人、秀甫が赤面してまで拒絶した九段に昇るに至ったが、
韓国反日暴動1907＝56歳：_老人性結核で、_没した。